

# 長生村指定文化財

## 1 一松神社御的神事

MAP E-4



●所在地/長生村一松 ●伝承者/一松神社氏子  
 ▶一松神社の神占いであるお的式は、天文3(1534)年正月4日に始まったといわれ現在に至っている。和紙28枚を張り合わせて作った直径90cmのお的には、白と黒の六重の丸を描いたものを3本の竹で支える。弓を射るのは神主でお的を約15mぐらゐの所から射る。第一の矢は、この年の吉凶(神の矢)、第二の矢は、早生稲の豊凶(早生の矢)、第三の矢は、中生稲の豊凶(中生の矢)、第四の矢は、晩生稲の豊凶(晩生の矢)。  
 これらの神占いより作柄を予想して種蒔きをする。神社の年の初めに行われる神事の一つで、現在もそれぞれの子孫が受け継いでいる。

## 2 虫供養の碑

MAP C-3

●所在地/長生村岩沼 ●所有者/個人蔵  
 ▶百虫の精霊をなくさめるために建立された「虫供養の碑」は、高さ1.8m、幅75cm、大正12年に建てられたもので、歴史的には古いものではないが、全国でも珍しい碑であろう。  
 この碑には謡曲松虫の一節が刻まれ、「長南夜雨狂庵主知白識」とあり、長南町の小池栄三郎の文であり、てん額は豊栄村の白井喜右衛門(元県会議長)の筆によるもの。  
 江戸時代の文化12(1815)年、岩沼川城福松(屋号佐瀬半兵衛)が鳴き虫をつかまえ、温室でふ化し、成虫にして五月初旬に売り出した。明治大正年間、東京下町の本所、深川、早稲田等の問屋に虫を卸し、一時は業者の数も数百軒に達した。大正末期業者の数も減り、これは虫の怨霊のたたりだろうという声もあったので、佐瀬松吉らが地元業者や、東京の虫問屋に呼びかけて建てたのが、この供養碑である。



## 3 元禄津波の大位牌

MAP E-4

●所在地/長生村一松 ●所有者/本興寺  
 ▶元禄の津波は近世において、九十九里沿岸を襲った最大の津波で本興寺の「元禄津波溺死者之霊」の「大位牌」は貴重である。  
 この津波は元禄16(1703)年11月22日夜四ツ時(午後10時)大地震3度あり、海鳴り激しく夜ハツ半(午前3時)ごろ津波が押し寄せた(萬覚帳)。震源は房総南東沖、マグニチュード8.2(県資料)と推定される。波高6mくらい、一松郷内の人畜の被害は甚大であった。一松郷の死者845人、本興寺に埋葬したのは檀家の384人であった。虫喰いの大位牌は戒名だけ記され、高塚村、初崎村は全滅にひんした。

## 4 伊勢詣道中図

MAP E-4

●所在地/長生村一松 ●所有者/一松神社  
 ▶この絵馬は、全国的飢饉にあえいだ天保7(1836)年一松郷内の人々、驚村東間茂左衛門ほか17人が、伊勢皇太后宮に詣で、道中つづがなく帰村し、報恩感謝の心をもって、遊歴の絵師春溪に、道中姿を板に描かせ、九月、第六天、諏訪神社(一松神社)へ奉納した小絵馬である。幕末のころ、国学が盛んとなり、平田篤胤に国学、神道を学んだ、神官狩野伊豆守保村の教化であろうか。五穀豊穡、家内安全を祈ったのであろう。時代世相を反映し、旅装束の手甲、脚絆、紺の股引き、すげ笠は、その頃の風俗を知る上で、歴史的絵馬として貴重である。



## 5 三嶋神社本殿と棟札・千木・堅魚木

MAP D-3

●所在地/長生村宮成 ●所有者/三嶋神社  
 ▶三嶋神社は、宮成下村にあり、康平6(1063)年、伊豆国(静岡県)賀茂郡三嶋大明神(現三嶋大社)の分霊を移したと伝えられている。同社に伝わる棟札に「天正六(1578)年戊寅頼朝公伊豆国賀茂郡三嶋大明神同社」と墨銘があった。祭神は大山祇命、事代主之命。その後、災害に罹り慶長10(1605)年3月11日三嶋大明神社が建立された。社殿の大工棟梁は三郎右衛門、願主は「宮成五十全衆」と棟札に墨銘されていた。  
 社は、江戸時代初期そのままの建築を継承し、本殿は切妻、平入の流造、屋根の両端から交差する2本の木が空に向ってつき出ているのを千木という。千木と千木のあいだに棟と直角に木が並んでいるを堅魚木と称している。現在江戸時代初期の千木と堅魚木が保存されている。



## 6 半鐘

MAP E-3

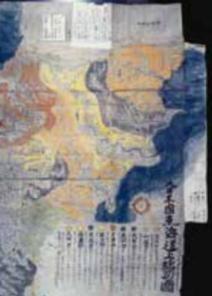
●所在地/長生村本郷 ●所有者/本照寺  
 ▶この鐘は、江戸中期から、本照寺に伝わるもので、鐘銘は福聚山本照寺とある。この寺院はもと一松郷原村の菩提寺で、そのころ打ち続く不漁不作で農漁民の生活が困窮した。一松郷内浦名主、蟹道村の五郎右衛門、溝代村の太郎左衛門、前里村の藤右衛門、新屋敷村の弥右衛門が発願となり、五穀豊穡海上安全豊漁祈願に、宝暦13(1763)年12月、田辺善兵衛保實の鑄造である。この鐘には龍頭・袈裟像と、上部に64個の乳があり、音響をよくするという。  
 撞木でつくった、静音を出し余韻がよいので、第二次世界大戦中、高根村消防団本部の警報用に使われたが、昭和18年供出され、戦後復帰した。



## 7 東海上総州図

MAP C-4

●所在地/長生村水口 ●所有者/個人蔵  
 ▶この古地図は、縦2m、横1.5mの和紙に「上総全州(市原、山辺、武射、長柄、夷瀧、周津、天羽、通生)八郡」の「村里一〇〇七」の村名と「郡界・山・河・池・沼・道路・有名社寺・城跡」等が記入されており、余白に「郡別、戸数、租税」が記入されている。  
 なお本図は、年代は記入されていないが江戸中期ごろのもので、幕府検地役人の所持したものを名主をつとめていた同家の祖先が写しとったものであるが、他に見られない貴重な地図である。



## 8 岩沼元古年来記

MAP C-4

●所在地/長生村岩沼 ●所有者/個人蔵  
 ▶文禄元(1592)年、岩沼の野口家六代長右工門が、岩沼村ほか世間の出来事詳細に書き留めた文書を、さらに九代長右工門が文化12(1815)年3月、書き加えてまとめたものである。内容のあらすじを紹介すると、岩沼の村名のとおり以前は、深い沼を開墾し誕生したのが岩沼である。開発後は取高により御年貢を上納してきている。本多忠勝は、大多喜十萬石を賜り、命により領内を検地したところ、370石の不足高があった(この不足高とは岡方未開墾地と浜方、すなわち東浪見から浜宿村まで43か村に対して塩年貢970俵を採塩地課税に対処して上納させた。その不足高塩970俵の分高米が370石である)。これらの塩年貢を取り扱った所を塩役所と称し、この地に置いたので、岩沼高と称した。この他一松郷宮成村、高根村の水論出入、寺社の争論、年貢の上納など、書き綴った貴重な記録である。



## 9 一松神社社殿

MAP E-4

●所在地/長生村一松 ●所有者/一松神社  
 ▶もと第六天、諏訪神社といひ、第六天神は寛治2(1088)年の創建と伝えられ、天正の末年ごろ、諏訪神社を合祀したといわれる。社殿は、慶長19(1614)年11月再建し、延宝のころから地頭内藤式部小輔正勝の守護あつて、寛保元(1741)年9月、内藤下総守大願主となり神官狩野播磨守保信のとき、社殿を造営す。大工棟梁は一松の長左衛門、屋根棟梁江戸の市左衛門であった。文化の初頭、拝殿、幣殿を焼失し、文政2(1819)年9月拝殿、幣殿を再建した。現在の社殿は、入母屋造の本殿と拝殿を幣殿で接続する複合社殿で、瓦葺銅板葺き、拝殿の向拝は二間繁垂木、頭貫虹梁、海老虹梁、広縁つき、本殿屋根は千木、堅魚木で彫刻は精巧である。



## 10 宮成の板碑

MAP D-4

●所在地/長生村宮成 ●所有者/三嶋神社  
 ▶本村唯一のこの板碑は、高さ38cm、横20cm(下部22cm)、厚さ2~3cmで頭部は山型の板状供養碑である。山型の頭頂部よりややさがつた所に、2cm間隔で二条の横刻があり、その下部中央の蓮台の上に大きく弥陀の種子が薬研彫りされている。その下部になお蓮華様の陰刻が見えるが下部が欠損(20cm程度)しているので判然としなない。なお紀年銘はないがほぼ14世紀ごろのもので推定され、本村開発史上貴重な史料といえよう。板碑は、「いたひ」、「いたび」と呼ばれ、その型式、材質などから「武蔵板碑」、「下総板碑」に分けられている。この板碑を含めて長生郡市内に数基あるが全部武蔵板碑で、俗に青石と呼ばれる秩父緑泥片岩を用いたものである。



## 11 高根本郷他二か村の初村会の絵

MAP D-2

●所在地/長生村本郷 ●所有者/個人蔵  
 ▶この絵図は、儒者、諸岡文節宅に寄寓した京都の画人小雅堂小六の筆によるもので、明治12(1879)年8月17日開会した高根本郷村・曾根・小泉村連合の三ヶ村の合同議会の模様を筆で着色して描かれたもの。  
 議場の正面が、当時の田中治郎作戸長、その右に諸岡五郎議長、諸岡文節副議長が着席し、議員22人が並んでいる。議場は本宮寺(廃寺)を仮議場とし、約150人の村人が傍聴につめかけた。チョンゴ議員3、4人とハイカラの洋傘を持ったり、赤ん坊をおぶった者もいるのに注目したい。  
 この村会は、連合村会と銘打って「広く会議ヲ興し万機論議ニ決スベシ」との趣旨の意味で、古来の封建制度を廃し、明らかなる村政を行うためと謳いあげ、「いやしくも村会議員たるものは、連合村三百有余戸の思ふ所を完全に反映し、時の県令(知事)柴原和の意を体して1998人の村民の生活をいよいよ高らしめん」と結んでいる。



## 12 元禄津波供養碑と供養塔

MAP E-4

●所在地/長生村一松 ●所有者/本興寺  
 ▶一松地域ほど、津波供養碑の多いところはない。それほど、元禄の津波(1703)の被害は甚大であった。供養碑は、本興寺墓地にあり、総高124cm、幅50cm、厚さ21cmと大きく、頭部は山型、代表的な板状供養碑である。  
 一松郷初崎村浦名主東条市郎右衛門が、一族の水死者の冥福を祈って建立したものである。紀年銘はないが、周囲の同型の供養碑から、宝永か正徳の頃の建立であろう。18人の法名が刻まれ、なかでも、子供の法名が多い。裏面には津波の状況が記され重要である。  
 「維元禄十六年十一月二十二日夜、当国一松において大地震あり、尋いで大波揚る。嗚呼天なるか。民屋流され、牛馬斃亡す。人は幾千萬たるを知らず・・・」とある。津波供養塔は、齋藤五右衛門、東条市郎右衛門が一松郷内の供養の時に、高さ145cmの碑を建立した。「元禄十六年十一月二十三日」と刻す。



## 13 筒粥占い

MAP C-1

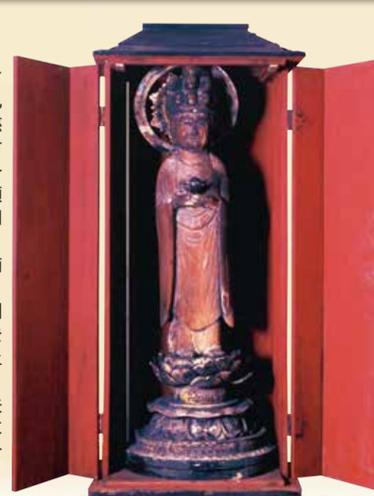
●所在地/長生村本郷 ●伝承者/八坂神社  
 ▶この占いは、高根新屋敷の鎮守現八坂神社に伝わる神事で、長さ9cmの葺の筒16本と、米一合を水の入った鍋に入れて炊き、筒の中に粥の満つる、満たざるを以てその年の農作物の出来ばえや、景気、不景気、吉凶等を占うために古来より正月7日に行われている。



## 14 木像十一面観世音立像

MAP B-4

●所在地/長生村水口 ●所有者/西福寺  
 ▶水口の天台宗西福寺内に安置されている十一面観世音立像の木像に「嘉祥元(848)年三月十八日慈覚大師作、長柄郡一之庄中水口村井下田惣左工門義長、奉観十一面観世音菩薩一条院三月十八日願主」と刻銘されていたことが井下田家文書に記されていた。  
 十一面観世音立像の材質は、楠で73cm、本面の上に10面をもち、すなわち正面の3面が慈悲、左側の3面が忿怒、右側の3面が牙をむき、後背1面は大笑いと、頂上が仏果をあらわしている。  
 眉間に「白毫」があったが紛失している。この像の棟札の裏側に「元禄十(1697)年まで五百九十歳」と記されている。



## 15 多宝塔・龍彫刻

MAP D-5



●所在地/長生村信友 ●所有者/本延寺  
 ▶本延寺は天文23(1554)年の開基で藤原寺の末寺である。  
 本堂内陣の須弥壇上にある多宝塔は郡内にも類のない見事なものである。昭和54年解体修理したが、制作に係る墨書はなかったものの前に置かれた、浮彫りの仏像の板の裏に、「當時二十三世日上人作並細色、小西北村幸達中席初、本願主当寺納所幸栄法作、寛政十二年四月出来」と記されているのでその時に出来たものと思われる。  
 また向拝上の龍の彫刻は房州賀茂村、川上伝吉郎と銘がある立派なものである。伝吉郎住家は後に後藤を名乗った名工である。



## 16 浅間神社社殿

MAP C-5

●所在地/長生村金田 ●所有者/浅間神社  
 ▶国道128号線沿いの丘の上に建つ浅間神社は木花咲耶姫命、大己貴命を祀り正徳元(1711)年の創建と伝えられる。  
 正面1.8m、横1.5m、棟高4.2mの小さな社殿だが1.5mの床上は正面両側面に高欄付きの廻縁を付け三方板壁で表は格子扉、海老虹梁で繋かれた向拝には浜縁付五段の階を付け極めて精巧緻細な工法で、一間社流造の粋を究めている。宮造りの匠「猫鉄」の明治初年の作といわれている。  
 柱上の組物、彫刻、二間繁垂木を使った屋根勾配も素晴らしく、流造本殿型式を備えた建築といえよう。



## 17 一松神社の右大臣、左大臣の彫刻と狛犬一對

MAP E-4

●所在地/長生村一松 ●所有者/一松神社  
 ▶一松神社の社殿に昇ると、祭神の両側に「右大臣・左大臣」と称する彫刻が安置されている。随身の彫刻製作者は「江戸京橋町大仏師八十吉作」と体内に墨書されている。次に「狛犬一對」の彫刻は「大工嶋村吉兵衛・江戸本町三丁目・元禄十三年七月吉日作」と体内に墨書されている。



## 18 深照寺の津波文書

MAP E-2

●所在地/長生村鷲 ●所有者/深照寺  
 ▶元禄16末(1703)年11月22日夜半、房州の南東沖を震源地とした大地震があった。この影響で大津波が房総沿岸ごとに九十九里海岸一帯を襲い、村々の人畜家財が流失し、幾千人という人が押し流され溺死した。  
 一松海岸においても津波に襲われ、家財道具は、流され多くの死者を出した。その内容を記した文書が、鷲の深照寺に伝わる「当山記録、津波諸精霊」で宝暦3(1753)年11月23日とあった。  
 文中には「女子供など二百六人死亡し」とあり、地震による津波の悲惨な出来事を、この日付で書き留めたものである。



## 19 ナギの木

MAP E-4

●所在地/長生村一松 ●所有者/個人蔵  
 ▶ナギは裸子植物、イヌマキ科の常緑喬木で、マキの近縁種であるが幹は直立して高く伸び、また樹皮は模様を描くように剥離して落ちる性質を持っている。葉は、裸子植物としては珍しい幅広い長楕円形で両端が尖り、葉脈は縦走している。  
 本邦暖地には自生しているが、庭木としても栽植される。奈良の春日神社のナギの純林(庭樹としてのものと思われる)は有名であるが、当地方にも稀に庭木として栽植されている。  
 ここにとりあげたナギは、根回り2m余り、樹高20mもあり、樹齢300年以上と推定される。方言ベンケイナダゴボシは、葉を指で縦に引くと丈夫で引き切れにくく、力持ちの弁慶でさえ涙(ナギはナミダの方言)をこぼすだろうという想像から、名付けたものと思われる。



## 20 本覚寺の四足門

MAP D-1

●所在地/長生村中之郷 ●所有者/本覚寺  
 ▶山門の屋根の反りは穏やかで、両側に降り棟というものが取付けられ、真ん中に寺紋が付され両側には男木と女木という木鼻があり、梁木の真ん中に頭貫で結ばれ、その左右には縦連子格子がはめ込まれて斗拱というもので組合されている。控え柱(親柱)の前後に二本ずつ四本あるので、これを四足門または四脚門という。この山門の建造年代は不詳であるが、おそらく室町時代から江戸時代初期と思われる。この時代には彫刻などの装飾がなく、素朴な木彫りの山門を保持している。



## 21 河施餓鬼

MAP G-2

●所在地/長生村一松海岸 ●伝承者/一松地曳網 網主  
 ▶河施餓鬼とは、地引網の網主が毎年輪番で施主となり一松地区の僧侶、網主、近隣の人たちが施主宅に集まり、一松山本興寺に格納されている八大龍王像を仏壇前に置き、船主繁栄、船中安泰、乗子安全、海上安全、豊漁満足ならしめ給えと唱え法要を行う。その後海岸に向かい、波打ち際に仮祭壇を設け、八大龍王像を置き、施主宅と同様の祈願を行う。続いて(東海岸溺死者之霊)と書かれた7尺以上もある角塔婆をたて、過去から現在に至るまでの水難による溺死者の向う供養を行う。  
 河施餓鬼は、江戸時代の終わり頃から伝えられており、毎年8月28日に一松海岸で行われている。

